



高橋余一の「生活絵巻」



13 桶屋

昭和三十一年代ごろまでの暮らしの中には、木桶おけや竹でできたさまざまな道具がありました。桶おけやたらいなどは、一年も使うとたがが緩み、使い勝手が悪くなりました。

桶屋は家々をまわり、門先の作業場で修理をします。「生活絵巻」には、ムシロの上ではった姿の職人が、両足でしっかりと桶を支え、木槌きづちを打ってたがを締め直している様子が描かれています。周りにはたがにするために細く割って丸くまとめた竹や道具の入った木箱が見えます。

このほかに臼やのこぎりを修理する目立屋、鍋や釜を修理するいかけ屋などがありました。

(上の絵)

桶屋

自転車に道具や竹たがを乗せて桶類の修理に村を廻るツルベ(釣瓶)チヨウケ(手桶)タライ(洗濯用)ハンゾ(洗面用)など、の桶類が日常生活に欠かせなかった。往時この廻ってきける桶屋さんの存在は大変重宝なものだった。



▶牛舎前で糞フコを切ってかいは桶に入れる様子(昭和期)

■ただいま文化の森では民俗資料の展示として、収蔵品展「蚕とまゆ展」を開催しています。
(9月1日回まで)